

農福連携推進東海ブロックシンポジウム

農業に取り組んでいる高齢者施設・事業所等に  
対するアンケート調査の実施について  
(調査結果の概要)

平成31年1月31日  
厚生労働省  
東海北陸厚生局 健康福祉部

# 事項

- 回答施設等の概況
- 取組の状況
- 取組による効果
- 自由記載の内容
  - ・利用者に対する効果検証の実施について
  - ・マイナス面の効果について
  - ・行政に期待することについて
  - ・意見、要望について

# 農業に取り組んでいる高齢者施設・事業所等に対するアンケート調査の実施について (調査結果の概要)

## ■概要

東海北陸厚生局では、高齢者施設・事業所における農業の取組の実態を把握するため、高齢者施設等対象としたアンケート調査を実施し、17件の回答があったもの。

※本アンケートにおける「農業」には、施設内の自家菜園や簡易な農作業を含む

## ■調査対象

- ・岐阜県、愛知県、三重県の高齢者施設・事業所

## ■調査期間

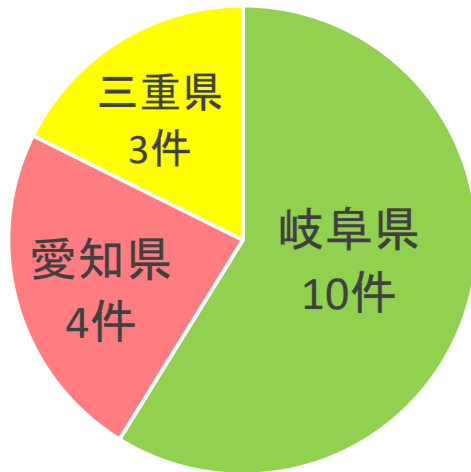
平成30年11月16日～11月30日

## ■調査依頼ルート

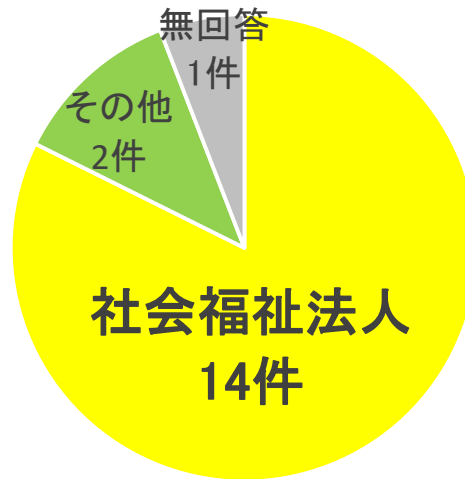
- ・各県の老人福祉施設協議会の協力を得て、ホームページ等を通じて施設等へ依頼

## 回答施設等の概況

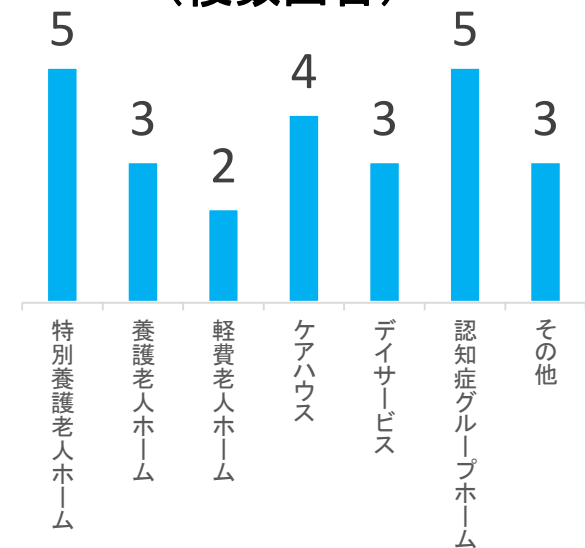
### 回答数(県別)



### 開設(経営)主体



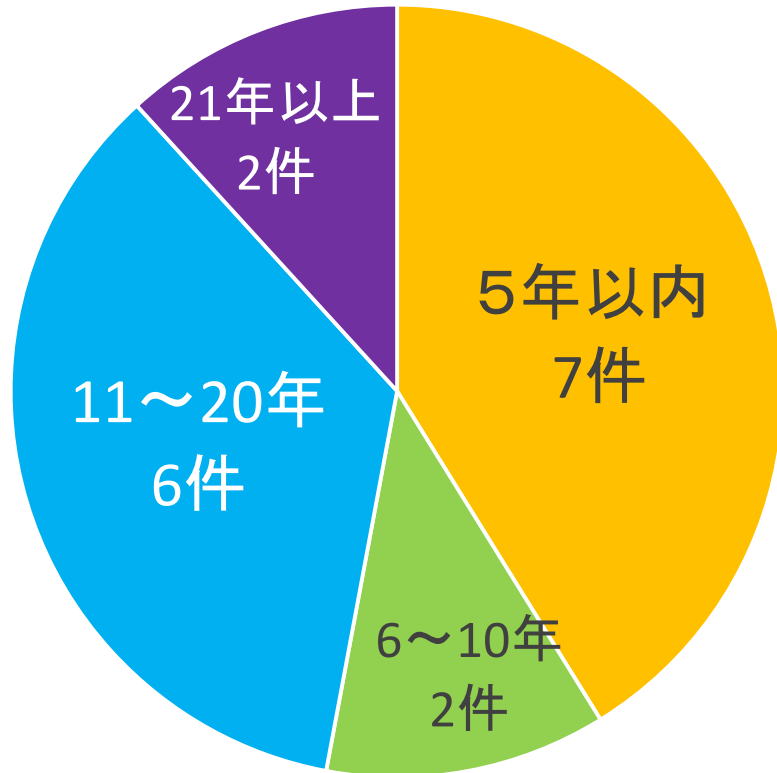
### 施設・事業所の種類 (複数回答)



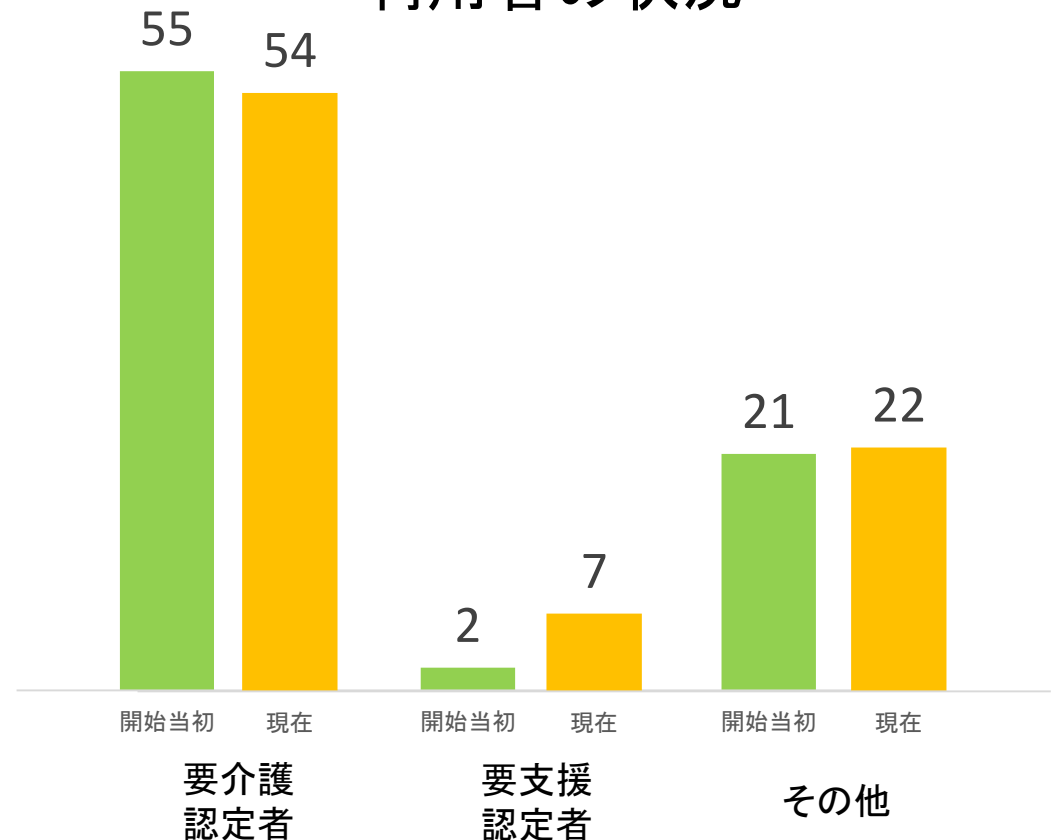
# 取組の状況①

- 農業の活動年数については、5年以内(7件)がもっとも多く、次いで11～20年(6件)が多かった。
- 農業部門にかかわる利用者の状況は、要介護認定者が最も多く、開始当初から現在(平成30年)に至るまでの人数の変動はあまりみられなかった。

## 農業活動年数



## 農業部門にかかわる利用者の状況

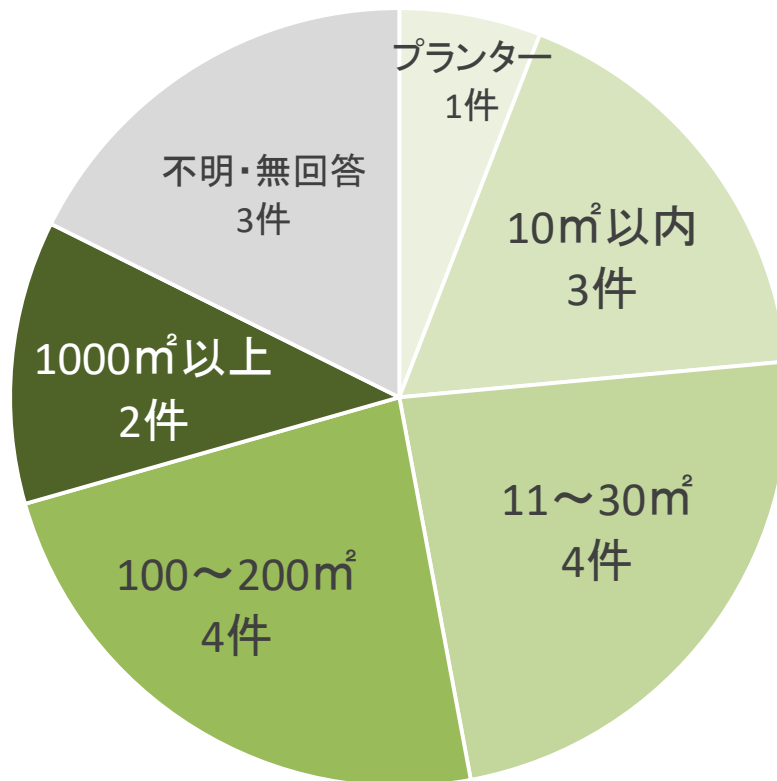


## 取組の状況②

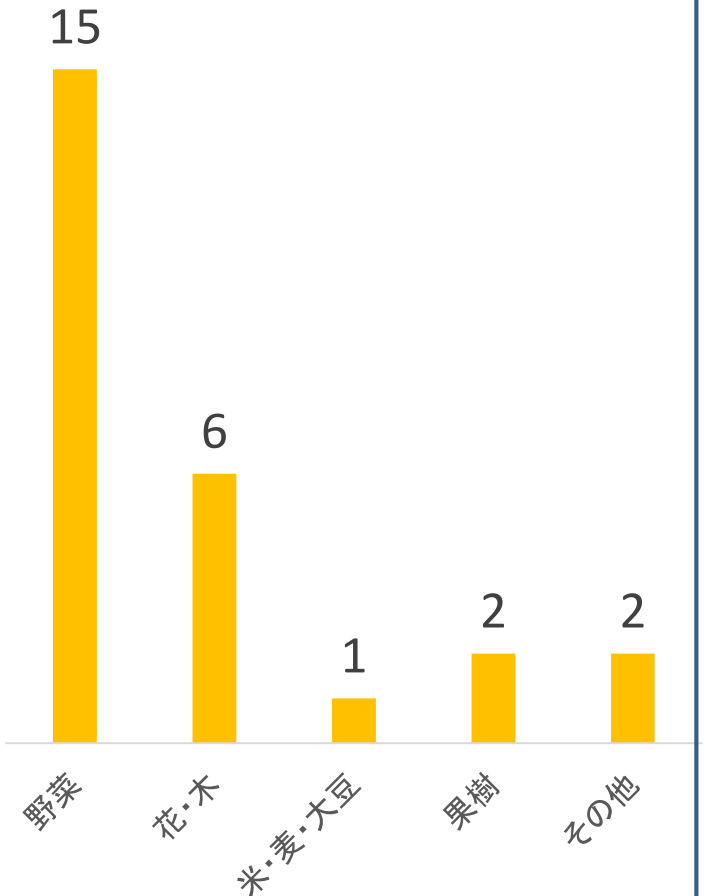
○農地面積については、ほとんどが200㎡未満(12件)であったが、1,000㎡を超えるところも2件あった。

○農作物については、ほとんどが野菜(15件)、次いで花・木類(6件)であった。

### 農地面積



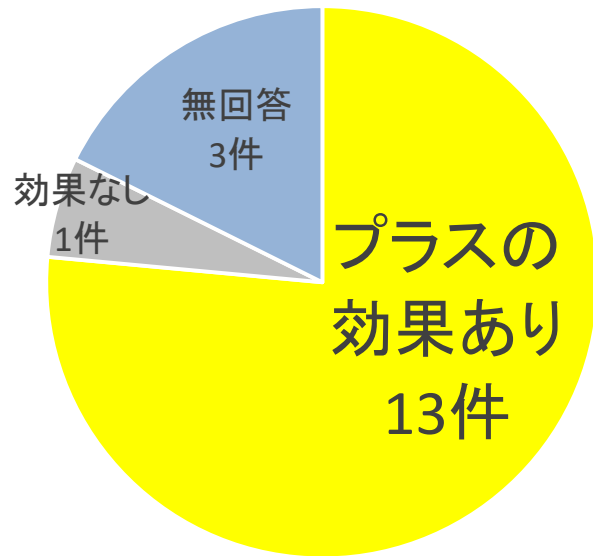
### 農業の品目等 (複数回答)



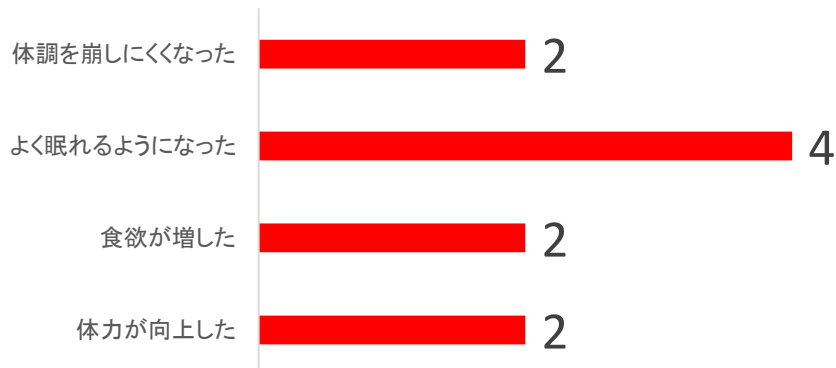
# 取組による効果

○回答のあった17件のうち、13件(約8割)がプラスの効果があったと回答

○意欲の向上、表情の明るさ、コミュニケーション力の向上について効果ありとの回答が多かった。



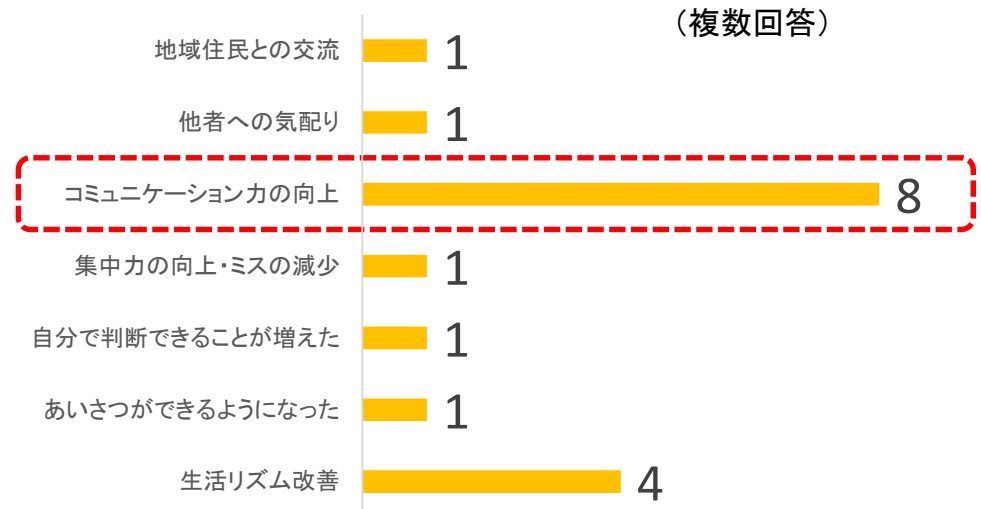
## 身体面・健康面 (複数回答)



## 精神面・情緒面 (複数回答)



## 生活面・仕事への取組む姿勢 (複数回答)



# 自由記載の内容(抜粋)

## 利用者に対する効果検証の実施について

- 自宅にいるときに、農業をされていた方は、喜んで取り組まれている。
- 現在の従事者(利用者)は入居当初から取り組んでいるため効果は不明
- 当施設は家庭菜園を楽しむ程度です。収穫した野菜を時折皆で食べて楽しんでいます。しかし、最近の特養の重度化により、畑仕事ができる人はほとんどいません。入居者様の教えにより、職員が見よう見まねで畑仕事をしています。入居者様は自分の知識が人の役に立つことで楽しみを見いだされているようです。
- 作業量の負担が多く、参加は一部に限られているが、収穫には満足感が得られている。
- 家族から「危険」と言われ、畑仕事や外出することができなくなった利用者様との会話に畑仕事が自慢でもあり、生き甲斐だったという声を聞き、苗や準備物、仕入れ等の仕方などを聞き取りながら一緒に活動しました。また、作業を見ていた利用者様から「私も、草むしりなら手伝うよ」という声が聞かれ、作業や声のトーンが変わっていく姿を見ることができました。さらに、収穫の際には「これは自分が手伝った野菜だ」という声が聞かれ、周囲の雰囲気がよく、いつもは表情を変えない利用者様に笑顔が見られました。
- 山間地に立地しておることから、利用者の大半が過去より農作業を経験されていることから、少なからず生き甲斐には繋がっていると感じる。

# マイナス面の効果について

- できる方とできない方を目の当たりにすることがあり、配慮する必要があると感じました。身体機能での低下はありますが、体が覚えていることで、とてもうらやましそうな表情をされている様子を見たことがあります。(プラス面)畑の様子を見に行き、成長を楽しみにしている様子や行動範囲が少し広がったように思えます。
- グループホームで農業活動していくに当たっては入居者の身体状況と職員のマンパワーが必要になるが、私どもの事業所においてはどちらも足りない事もありプランター栽培が限界である。地域力を借りることで実現可能にはなるとは思うが現実的に開拓していく事も困難な状況にある。
- 施設の中庭が荒れ放題であったため、土を入れ、小さな畑を作り、夏野菜、芋類を栽培してきた。施設で収穫した野菜を調理し、昼食時に提供すると喜ばれた。また、自宅に畑のない方は、収穫の楽しさを感じていただけだが、土地柄、農家の家庭が多く、手伝おうとはされない方もいた。
- 家庭菜園程度で、実施回数も少なく、効果は感じないが、収穫の際には喜ばれている。
- マイナスと感じたことはありません



# 行政に期待することについて

- 農業用品や、種、苗などの補助
- 農業と福祉との連携をアピールするパンフレットの作成
- 障害を持つ方や高齢で多少物忘れの症状がある方でも、誰かが助言や見守りを行うことで本人の能力を発揮することができると思います。今後、地域で行われる行事等に案内し参加を呼びかけたり、その際に「できること」アンケートなどを取り、本人が自信を持って参加できる機会を設けてほしいと思います。
- 農業団体からの声掛けによりマンパワーを貸してもらえれば参加できる入居者もおられるので、農業場所等の環境も含め仲介をしてもらう事を期待したい。

# 意見、要望について

- 当施設では、施設の畑で収穫したものは、昼食やおやつ作りに使用したが、小さな畑である為収穫量は少ない。市が無償で畑を提供したとしても、人手が必要になる。また、畑までの移動時間や移動手段の確保が難しい。通所系の事業所は、特に1日のスケジュールが決まっているため難しい。グループホームのような入所系の施設が、回想法の一つとして、種まき、植え付け、草引き、収穫が行えると良いと思う。そのためには、農業指導者の確保やボランティアが必要になるが、最終的には、利用者自身が、農業指導者として力が発揮できれば良いと思う。

- 「参加・観る楽しみ・人との交流の場に参加する」ことで、生き甲斐につながれたら良いのではないかと思います。自分で農作物を作っていた方はもちろん、農業を知らない方でも、新鮮な野菜を手取る、見る、どのように作るのか？などと意見を交わすことができる場所があることで、日々の生活に生き甲斐を感じたり、閉じこもりの生活から「やる気」に繋がり物忘れの予防にも繋がるのではないのでしょうか。当事業所においては、自宅では家族と会話をしなくなったご利用者様が畑の棟を作り、イチゴの苗を植えてくださいました。職員との会話の中でのやり取りも肥料・手順・水やり・収穫の時期を想定し楽しみに会話をされる光景があり、その内容を家族に話されたとの報告がありました。ご家族とのちょっとした「絆」の復活であると感じました。是非、参加型の催し物の開催をお願いしたいと思います。事業所においても小さな畑ですが法人で場所を確保していただき感謝しています。
- 農作業でも単純な作業であれば認知症を患っていてもできる事はあるし、入居者の方もやる事がある事での生きがいにつながると思うので施設で手伝えることがあれば協力できると思う。
- 花の苗、土、肥料を寄付していただけるとありがたいです。
- 養護老人ホームでは高齢化・介護度の重度化が進んでおり入所者の生き甲斐作りとしての活動となる。
- 当施設はJAが設立母体であることから元々「土」と触れ合える環境を継続できるような福祉施設を目指してきた。そのため施設の中庭を中心に農地(畑)として活用できるよう環境を整備している。車いすの方にはプランターを手の届く位置に設置することで作業しやすい環境などを整備している。他に目を向けた時、障がい者を中心に農業との連携がなされている事実は知っているが、高齢者施設のみで考えると、身体機能の低下が連携促進できていない根拠の一つとして挙げられると感じる。介護予防の一環としての位置づけであれば高齢者福祉における連携として認知されていくと思われる。